

個性的な地域づくりと風土工学的アプローチに関する研究*

A study of "Fuudo Technology" approach in Vernacular Regional Planning*

鈴木義康**, 竹林征三***

By Yoshiyasu SUZUKI** and Seizo TAKEBAYASHI***

1. はじめに

近年, これまでの機能追求に偏った土木事業等のやり方が問われ, 地域の個性を活かしたまちづくりが求められている. まちの骨格を形成する道路や河川等の土木事業をはじめ, 関連する道の駅や水辺空間の整備においても, 地域の風土個性を活かした地域文化形成の役割が強く求められるようになってきた. すなわち, 土木事業においても個性的な地域づくりを担うよう, 最適化原理に代わっていわゆる個性化原理の導入が必要となってきた.

人に個性があるように地域にも個性がある. 地域の個性はしばしば隠れていることが多い. その地域に住んでいる人々も地域のもつ素晴らしい個性に気づかず, あるいは, 気づいていても誇りと思っていないこともある. このような地域個性の存在を認知・評価し, 土木事業等に反映していくことがまさに求められている.¹⁾

本研究は, この地域個性の形成に資するローカル・アイデンティティに焦点をあて, その構造について明らかにするとともに, 地域住民と他地域の人々との地域個性に対する認知, イメージの違いを分析し, その結果にもとづく地域の個性化へのプロセスの提示, そして更に, 風土資産に着目した地域イメージの構造化を用いた地域振興・活性化へのアクションプログラム作成手法の提案を行うものである.

2. ローカル・アイデンティティの構造

心理学者ブーゲンタル, J. F. T & ゼレン, S. L, 1950は "Who are you test" という心理検査法を考案した. 「あなたはどのような人ですか」という問いに対して自由記述で答えるだけのテストであるが, 自己 (Self) を見つめ直すのに基本となる検査法である. この自己像について梶田 (1980) はうまく整理を行っている. 今, 対象としているのは地域個性であり, 自己のかわりにローカル・アイデンティティと置き換えることにより, 図-1に示すようなローカル・アイデンティティの構造が得られる.

この構造図から, 地域個性は六つの要素から構成されることがわかる.²⁾

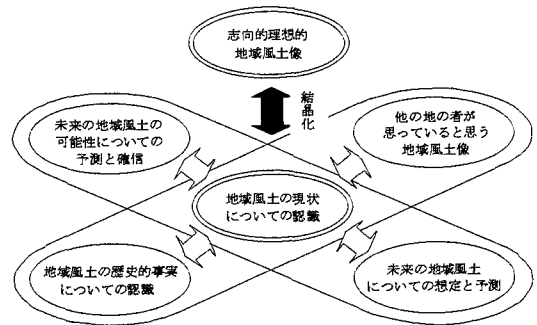


図-1 ローカル・アイデンティティの構造
・六構成要素

このことから, 個性的な地域づくりのためには, これらの六つの構成要素をしっかり認識し, アイデンティティを発揮させることが肝要である. 具体的には地域づくりのコンセプト作成等にあたり, 表-1に整理される内容を事前に把握・分析しておくことが考えられる.

* キーワード: 地域計画, 意識調査分析, イメージ分析

** 正会員, 工修, (財)土木研究センター風土工学研究所

〒300-2624 茨城県つくば市西沢2-2

TEL 0298-77-1383, FAX 0298-77-1404

*** フェロー会員, 工博, (財)土木研究センター風土工学研究所

〒300-2624 茨城県つくば市西沢2-2

TEL 0298-77-1383, FAX 0298-77-1404

表－１ ローカル・アイデンティティの六構造

①地域風土の現状についての認識	立地条件等の地理的特徴，人口や産業等の社会的特徴等にもとづく現状についての認識
②未来の地域風土についての想定と予測	その地域の地理的，社会的特性等を活かして，今後，どのようなまちに発展していくであろうかというような未来についての想定と予測
③未来の地域風土の可能性についての予測と確信	高速道路ができると新たな内陸型ハイテク産業が立地する，大学を誘地するとそれを中心とした文化機能が充実するといった未来の可能性についての予測と確信
④地域風土の歴史的事実についての認識	戦国大名の城下町として栄えた所とか，〇〇の合戦があった所であるといった歴史的事実についての認識
⑤他の地の者が思っていると思う地域風土像	他の地の人々はその地域を歴史的な観光都市として見ているだろうといった地域風土像
⑥志向的理想的地域風土像	地域の人々が未来にわたって誇りをもてる，こうあって欲しいと願う志向的理想の風土像

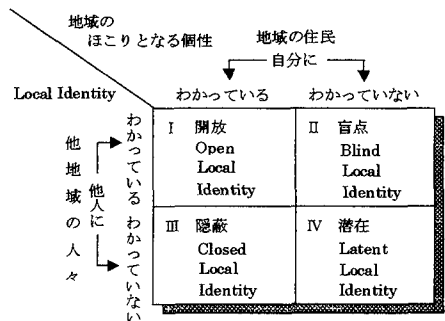
３．ローカル・アイデンティティの四窓分析

(1) 四つの窓

自己を一つの窓に見立てて，横枠を自分で分かっている部分と分かっている部分とに分け，更に縦枠を他人に知られている部分と知られていない部分とに分けると，その組み合わせから四つの小窓ができる。これは心理学で“Jahari Window”と呼ばれるが，ローカル・アイデンティティについても同様に分類できる。（図－２）

四つの窓はその領域により，Ⅰ．開放（Open Local Identity），Ⅱ．盲点（Blind Local Identity），Ⅲ．隠蔽（Closed Local Identity），Ⅳ．潜在（Latent Local Identity）と定義できる。

すなわち，Ⅰ．開放（Open Local Identity）は，その地域の住民にも，他地域の人々にも同じように分かっている「開放」されている地域の個性領域である。Ⅱ．盲点（Blind Local Identity）は，その地域の住民が気付いていない部分で，他地域の人々が見抜いている部分であり，「盲点」というべき地域の個性領域である。ここでは，他地域の人々が気づいている当地域の欠点といったものを地域住民が認めたくないというジレンマの側面もありうる。Ⅲ．隠蔽（Closed Local Identity）は，その地域の住民は良く分かっているが，他地域の人々は分かって



図－２ ローカル・アイデンティティの四つの窓

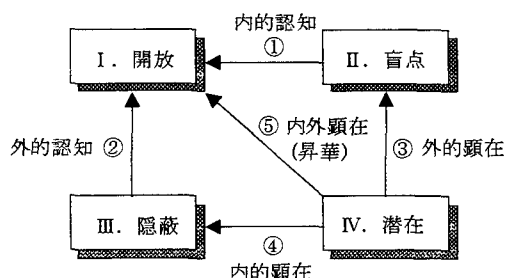
いない「隠蔽」された地域の個性領域である。この領域は地域個性の深みや奥ゆかしさといった側面と，他の地域の人々に知られたくないという側面とを併せもつ。Ⅳ．潜在（Latent Local Identity）は，その地域の住民も，他地域の人々も分かっていない未知の領域であり，いわゆる「潜在」的な風土個性である。

(2) 地域の個性化プロセス

ローカル・アイデンティティを四つの窓に分類することにより，今後の地域の個性化へのアクションプログラムの糸口が見出される。

すなわち，地域個性はその地域の住民が誇りに思

い、かつ、他地域の人々もそれを認知している状況が好ましい。したがって、Ⅰ．開放の状態がそれに当たり、他の三つの状態にあるローカル・アイデンティティをⅠ．開放の状態に近づけていくことが地域個性の拡大につながる。そのプロセスは図－３のように表現できる。



図－３ 地域の個性化プロセス

①内的認知

このプロセスは「Ⅱ．盲点」のレベルの地域個性を「Ⅰ．開放」領域に向かわせるものであり、他地域の人々が評価している地域個性を地域住民が感じ取り、認知するプロセスである。

②外的認知

このプロセスは「Ⅲ．隠蔽」のレベルの地域個性を「Ⅰ．開放」領域に向かわせるものであるが、この場合、地域住民のみが知っている地域の個性としての深みや奥ゆかしさを他地域の人々へ情報発信して認知されるプロセスと、一方、他地域の人々に理解を求めようとしない地域コンプレックスの部分を情報公開していくプロセスとが存在する。

③外的顕在

このプロセスは、例えば地道な研究者等により発見された地域の情報が特定分野の人に認知・評価されるようなプロセスである。すなわち、「Ⅳ．潜在」のレベルから「Ⅱ．盲点」のレベルへ移行するプロセスであり、いわゆる外的な顕在化といえよう。このプロセスを経て、更に地域住民の認知（内的認知）の過程により「Ⅰ．開放」へと向かう。

④内的顕在

このプロセスは、地域住民が時代に流されない素直な視点で地域自身の良さを見つめ直すこと等によ

って、「Ⅳ．潜在」のレベルから「Ⅲ．隠蔽」のレベルへ移行するプロセスであり、いわゆる地域愛による内的な顕在化といえよう。このプロセスを経て、更に地域住民から外部への情報公開、情報発信による認知（外的認知）により「Ⅰ．開放」へと推移する。

⑤内外顕在（昇華）

このプロセスは、「Ⅳ．潜在」のレベルから一気に「Ⅰ．開放」のレベルへ昇華する、内的外的ともに顕在化するプロセスであるが、一般的には③→①、④→②のプロセスを経ることが多いと考えられる。

４．地域振興・活性化へのアクションプログラム作成

(1) 自由記述アンケートによる方法

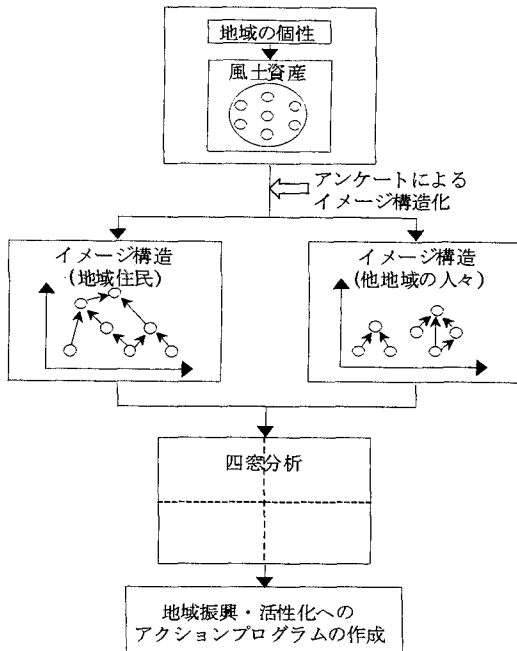
地域住民および他地域の人々に対象地域の個性についての自由記述アンケートを実施し、その結果を３．に示した四つの窓に分類し、いかに「Ⅰ．開放」の領域を拡大するかを分析することによって、地域のアイデンティティ確立、拡大へのアクションプログラムを作成することが可能である。手法としては直接的かつ簡便な方法といえる。

(2) 風土資産の認知度に着目した方法

この方法は地域個性を地域に存在する風土資産に代表させて、認知度の違いによって四つの窓に分類するやり方である。自由記述アンケートに比べ内容が具体的であり、有効なサンプルが得やすいという利点がある一方、代表的風土資産の抽出に工夫を要する。

(3) 風土資産間のイメージ連想構造を用いた方法

同様に風土資産に着目し、風土資産間のイメージ連想構造を分析し、地域住民と他地域の人々のイメージ構造の違いから四つの窓に分類する方法である。この場合のイメージ構造化手法としては、言語連想アンケートによるイメージ構造化の手法^{3), 4), 5)}が考えられる。分析手法が複雑であるが、風土資産の重み（イメージウエイト）やイメージ連想関係により、より具体的なアクションプログラムの作成が可能となる。（図－４）



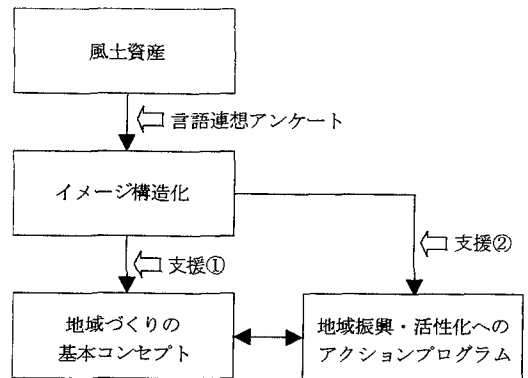
図－４ 地域振興・活性化へのアクション
プログラム作成フロー

5. おわりに

本研究ではまず、個性的な地域づくりに向けて、ローカル・アイデンティティの構造を明らかにすることによって、具体的な六つの構成要素を形成する重要性を指摘した。これは、地域づくりの基本コンセプトを作成する際に、あらかじめ六つのローカル・アイデンティティを確立しておくことにより、将来個性的なまちの形成に資するという点で有効であると考えられる。(図－5、支援①)

次に、地域個性を地域住民と他地域の人々との認知、イメージの違いによって、四つの領域に分類することにより、地域個性の拡大プロセスを示した。そして更に、風土資産に着目した地域イメージの構造化をベースとして、地域住民と他地域の人々とのイメージ構造の違いから四窓分析を行うことによって地域振興・活性化へのアクションプログラムを作成する方法を提案した。(図－5、支援②)

これらは、既往研究成果^{5), 6)}である風土資産のイメージ構造化と基本コンセプト創出手法の流れの中で、個性的な地域づくりに向けて、いづれも支援シ



図－５ 個性的な地域づくりの支援システムフロー

ステムとして機能しうるものである。(図－5)

事例研究については紙面の都合上掲載できなかったが、当日発表したい。

参考文献

- 1) 竹林征三：「風土工学誕生の歴史的時代背景」，「土木技術資料」，土木研究センター，Vol. 38，No.11，pp20～24，1996. 11
- 2) 竹林征三著：「風土工学序説」，技報堂出版，1997. 8
- 3) 竹林幹雄，佐佐木綱，東徹：「民話を用いた地域づくりに関する研究」，土木計画学研究・講演集 No. 14(1)，pp221～228，1991. 11
- 4) 藤井崇弘：「風土分析による地域計画手法に関する基礎的研究－民話分析によるアプローチ」，京都大学博士論文，1992
- 5) 竹林征三，古川博一，野村康彦，鈴木義康，茂原朋子，中川浩二：「地域整備計画におけるデザインコンセプトの創出に関する風土工学的研究」，土木計画学論文集No.13（審査付部門），土木学会，pp173～184，1996. 9
- 6) 竹林征三，川崎秀明，野村康彦，鈴木義康：「風土工学に基づく地域整備の基本コンセプト創出に関する考察」，土木計画学研究・講演集，No. 19，pp87～90，1996. 11